



春になると機械の手入れもするという近藤さん

道南、森町に、小さな体で大きな重機を自在に操る女性オペレーターがいます。1962年に森町で創業した(株)河野組に勤務する近藤厚子さんです。冬になると巨大な除雪車に乗り込み、早朝から町内の雪をくまなくかき分けます。道南では珍しい女性の建設機械オペレーター、近藤さんに会いに森町を訪れました。

「大きな機械を運転することが夢だった」

森町出身の近藤さん。地元の高校を卒業した後は、家業の農業を手伝っていました。当時からトラックやトラクターを運転していて、「小さなころから大きな機械を運転するのが夢でした」と言います。

介護施設でヘルパーを経験したこともありますが、1997年にあこがれの大型トラックを運転したいと大型免許を取得。地元の温泉施設にも勤務経験があり、当時は送迎用の大型バスの運転やショベルカーで駐車場

の除雪作業を担当していました。温泉施設の社長が建設会社も経営していたため、ドライバーが足りないときには、ダンプカーも運転していました。「二人の子どもが休みの日には、子どもをダンプに乗せて走っていました」と笑います。

そうした経験を積む中で、「アルバイト的に大型車に乗るのではなく、きちんと仕事にしたい」と2006年、町内にある河野組の関連運送会社、日本一運送(株)に入社。ドライバーとして採用されました。バックホウやショベルカーなど、操作できると思った機械があれば、積極的に声を上げて、ほとんどの機械を乗りこなすようになりました。そして、2014年に河野組に移籍します。

「初めは積み込み方が下手で怒られたことも」

河野組は従業員約70名、現在は函館市に本社を置いています。森町出身の従業員が多いことや、創業地で

地元に着した業務を行い地域に貢献したいということで、今も森町に本店を置いて本社の事務機能を担っています。創業以来、森町の基幹産業を支える漁港整備や浚渫工事などの港湾土木分野を中心に実績を積んできました。1998年には東北支店も開設し、2011年の東日本大震災以降は東北の復興事業にも積極的に関わってきました。

近藤さんの上司に当たる取締役総務部長の河野文彦さんは「当社に移籍したときには、おおかたの機械に精通していて、ほとんどの運転技術を身につけていました。たぶん当社で初めて操作したのは、除雪車くらいじゃないかな。今では大型クレーン車以外はほぼ運転できるので、非常に力強い存在です」と近藤さんの活躍ぶりを実感しています。

一方、近藤さんは「私のような人間に重要な仕事を任せていただいて感謝しています」と言います。中でも印象深かったのは、町内の港で担当した荷受け業務。港に入ってきた大量の骨材を次から次とショベルカーですくって、運搬用のダンプカーに積み替える作業です。迅速に、ほどよい量で、傷をつけないように複数のダンプカーに流れ作業で積み替えを行わなければいけません。「最初のころは、女性だからとダンプのドライバーに馬鹿にされたり、積み込み方が下手で怒られたりして大変でした。でも、今では皆さんと仲良く仕事ができる関係になっています。きちんとした仕事をしていれば、認められるのがこの仕事です。『母さん、また来いよ』と声をかけられたときは本当にうれしかった」としみじみと語ってくれました。



スピードと正確さが求められる荷受け作業

「運転席に座ると、不思議と気持ちが切り替わる」

近藤さんの重要な仕事のひとつが、冬の除雪です。巨大な除雪車に乗り込んで、町内の雪をくまなくかき分けています。

道南地域の冬は積雪量が少なく、除雪作業のために冬期間だけスタッフを確保することは、いろいろな面で難しさがあります。そこで、社員を駆使して態勢を組んでいますが、その中でも近藤さんは貴重な人材です。

冬は毎日天気予報をチェックし、出勤が決まれば午前1時には出勤。通勤・通学路は早めに終えなければいけません。そのほかの道路の作業を終えると午前10時ごろになることもあります。「特にJRの駅前は大変ですね。それでも、住宅街になると除雪車の音で外に出てくる人もいて、『ありがとう』と感謝の声をかけてくれたり、ジュースの差し入れをしてくれる人もいます。そんなことがあると、もっと頑張らなくちゃいけないと思います」と近藤さん。

「私は子どもたちが小さなころからダンプに乗っていました。当時は朝が早く夜も遅かったので、子どもたちには迷惑をかけたと思います。でも、機械に乗っていると楽しいのです。子どもたちに『ここはお母さんがやった現場だよ』と自慢したこともあります。また、除雪作業は地域の皆さんの役に立っていることを実感できる仕事ですね。少くく睡眠不足でも、運転席に座ると不思議と気持ちが切り替わるんですよ」と目を輝かせます。

上司の河野さんは「今後は建設機械施工管理技士の資格を取得して、管理者としても活躍してほしい。彼女なら、男性ばかりの現場でもみんなを引っ張ってくれて、女性ならではのムードメーカーになってくれるはずですよ」とこれからの成長に期待を寄せています。